

# アイヌタイムズ 第72号 日本語版

---

## ★ 国際母語の日 (1)

1952年2月21日に、現在のバングラデシュの首都であるダッカ(東ベンガル)の大学で警官がデモをした学生に発砲しました。これらの学生は、母語であるベンガル語の存在を認めるようにデモをしました。これらの学生は、母語であるベンガル語の存在を認めるようにデモをしました。この大学では、当時強い立場にある者が話していた「より大きな」ことばが有利となるようにベンガル語をなくそうとしていました。

ここで問題になっているのは、アジアのみならず、ヨーロッパのいくつかの国やその他の大陸でも、世界じゅうで全歴史にわたり、色々な形で繰り返し行われている先住民・原住民の言語に対する対応です。問題の多くは、ほかの言語(多くの場合、英語)の学習のために行った多大な努力や使用の義務や強制についてであり、これは経済的・政治的・軍事的な力を持つ権力が原因であり、自分の国際的地位を高めようとして地域の母語を軽視します。

「私は強い立場にあるので、あなたは黙るか、話したい時は、私のことばで話さない。」力の強い人はそのように考えるでしょう。

言語の死…消滅が少しずつ起きています。その言葉を使っていた人々は、多くの言語学者も指摘するように、すばらしい知識の宝庫を失います。

2019年には国連とユネスコはこのことについて特別に注意を喚起しています。2018年の世界エスペラント協会へのメッセージでは、ユネスコ事務局長であるオードレ・アズレが次のように表明しています:「私たちは言語

を守らねばなりません。それは主に先住民族の言語のようなまれにしか使われない言語についてです。それらの言語は、現在、2週間に1つのペースで消滅していることを私たちは知っています。これは人類の遺産にとっては修復のできない損失となります。

私たちは、教育の中で、多言語主義を守らねばなりません。それは、適切な公的な政策の中だけではなく、インターネットのバーチャルスペース(仮想的空間)でも同様です。このことは、すべての人間集団の言語と文化の多様性がこれからも維持され、誰でも自分の民族の歴史やアイデンティティ(自己同一性)を、民族のシンボルとなる起源から会得し学ぶことができるようにするためです。」

母語が使えなくなることや押し付けられた言語を十分に使いこなせないことから生じる社会的な不公平と心理学的な諸問題のほかに、次のような事実も意識することも必要です:それは、生物学的な多様性と言語の多様性は、相互に依存する関係にあり、別々には考えられない、ということです。

言語の多様性を失うと、生き残るためにそして、持続できる生物学的な多様性のために必要な伝統的な知識を事実上失うこととなります。[最終宣言、第64回国連・NPO・会議、ボン、2011、テラリングワ(地球語)]

1999年11月17日にユネスコは2月21日を国際母語の日と宣言しました。2007年に国際連合総会も「世界の諸民族に使われているすべての言語の保持と保護の推進」を加盟国に呼びかけ、同時に2008年に国際言語年も宣言しました。2014年にユネスコは、イリア・ボコヴァ事務局長のメッセージのエスペラント版

も自分のサイトに掲載しました。

2016年に国際連合総会は、先住民族問題に関する常設フォーラムの勧告に基づいて、2019年を国際先住民族言語年と宣言する決議を採択しました。その時、フォーラムは、世界で話されている約6700の言語の40%は消滅を強いられていると述べました。

その消滅を強いられている言語の多くが先

住民族の言語であるという事実は、その言葉を使っている先住民族の文化と知識体系が危機の状態に瀕していることを示しています。

（次の話は第73号に書くつもりです。）

〔横山 裕之〕 沙流・千歳